

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2015年10月18日

[テーマ] イクメン 仕事に逃げぬ者こそ

先日インターネットを見ていたところ、「イクメン」を自任する方がこんなことを発言しているのが目についた。「言葉の通じない赤ん坊の相手をするのに比べると、職場での仕事が如何に楽なことか。オレは仕事で忙しいんだという言葉は、子育ての^{つら}辛さを知らない人の能天気な言葉である」と。

実は1年ほど前に、同様の趣旨のことを妻から言われたことがある。当時の私は、長男の夜泣きでよく眠れない日々を過ごす中で、妻から言われたことを^え洩すだけの^非似非イクメン。仕事の山を片付けるため、おむつ交換やゴミ出しなど次々にやってくる注文から逃げるように、朝早くから仕事に出かけるようになっていた。そのことを見透かした妻からの指摘は「最近、だんだんと会社に行く時間が早くなっていない？」。

しかしその後、自分の意識が大きく変わる契機が訪れた。次男の誕生、である。もともと、妻が次男の出産のため入院する5日間は、私が長男の面倒をみる約束であった。朝は準備を整えて保育園に送り出し、夜は迎えに行き一緒に眠りにつく。それくらいなら、何とかなるはず。

ところが、その前後に長男は、流行していた手足口病に感染し（しかも2度も！）、保育園を休ませなくてはいけなくなった。妻や次男への接触も極力避けなくてはならない。そこで私は覚悟を決めた。導入されたばかりの短期有給育児休業を使い、一緒に毎朝6時に起床し、おむつ交換から食事、公園への散歩、買い物、お風呂、洗濯、寝かしつけまで全で行うことにしたのである。

その間、非常に大変であったが、大変さを上回る大きな収穫があった。長男との距離が非常に近くなったことである。長男は最初、私が離れていないと寝てくれなかった。しかし今では、私が近くにいないと寝てくれない。食事も、自分から私の膝の上に乗ってきて、せがむようになった。まだ1歳になったばかりで会話のできない長男であるが、コミュニケーションが取れる気がする。こうなってくると、^{つら}辛いどころか、楽しくて仕方がない。

今後は、「イクボス」の一人として、「イクメン」が単なるブームで終わらないよう、広く世の中に、男性の育児参加や働き方の見直しの意義を浸透させていかねばならないと考えている。「イクボス」とは、部下の仕事と家庭の両立を考え、そのキャリアと人生を応援することで、組織の業績においても結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことが

できる上司のこと。群馬県が考案し、普及に努めているキーワードだ。

仕事と生活の調和、ワーク・ライフ・バランスの推進の必要性は、出産・育児だけでなく、看護・介護などにおいても、当てはまる。制度を拡充し、その利用をしっかりと促していくことが必要だ。社員それぞれに大事な家庭があるという当たり前のことを改めて認識し、家族を大切にする、より働きやすい職場を作っていくといけない。

〔 日本銀行前橋支店長
 神山 一成 〕